

教授・学習1 (601~608)

座長 伊藤 康児・大野木裕明

601 子どもの一致学習と不一致学習の比較

奈良教育大学 杉 村 健

602 教示者と児童との社会的接触が教示の理解に及ぼす影響

筑波大学 中 山 勘次郎

603 子どもは教示と観察からどれほど学習できるのか

九州大学 安 永 悟

604 非教示的問題状況設定による「重さの保存」の学習援助の試み

東北大学 佐 藤 康 司

605 課題の実施回数に伴う幼児の直接学習と観察学習

相山女学園大学 大野木 裕 明

606 同時訓練と継時訓練による数の移調のその発達

琉球大学 前 田 健 一

607 分数概念の獲得におけるつまづきの研究——量分数と割合分数の混同はいかにすれば解消できるか——

小松島子どもの家子ども

療育センター 安 田 勉

608 対連合学習における刺激色の典型性の効果

名古屋大学 伊 藤 康 児

601 伊藤（名大）、丸野（九大）から、被験児が第1試行で選択した刺激に固執する傾向があるか、との質問がなされ、別の実験では、第1試行で選択された刺激を正刺激にすると学習が速かった旨報告された。丸野から、学習がチャンスレベルにとどまっている時点での一致群、不一致群の学習内容の差異について質問がなされ、検討したい旨回答がなされた。

602 伊藤（名大）から、事前テストにおける群間の成績差、前田（琉球大）から、実験ⅠとⅡで被験児の年齢が違ふ理由について質問がなされ、群間に差はない、課題への方向づけの難しさと評定用紙を使用する都合上、実験Ⅱでは年齢を上げた旨回答がなされた。丸野（九大）、北尾（大阪教大）、伊藤（名大）からそれぞれ実験者一被験者間の共感の成立しやすさへの考慮、媒介変数の重視、接触内容の分析、の諸点について必要性が指摘された。

603 佐藤（東北大）から、転移課題の教示が各群で同じであることを確認する質問がなされた。坂野（千葉大）から、結果の整理・分析についての質問に加えて、モデルが行ってみせる8試行だけで学習が成立したか、

60試行の転移課題では試行錯誤的学習がなされたにすぎないのではないか、との質問がなされた。

604 杉村（奈良教大）から、被験児の年齢分布、年齢と発語との関係について質問がなされ、4歳児2名、5歳児7名、6歳児5名である、年齢と発語との間に一貫した傾向はみられなかった旨報告された。伊藤（名大）から、被験児が不合理な行動をせずに重さの不変性を表明する年齢はいつごろか、自発的発語は誰に向けられたものか、との質問がなされ、ひとりの6歳児が重さの不変性を表明した、実験者からの促しに対する応答と考える旨回答がなされた。

605 伊藤（名大）、前田（琉球大）から、手続の詳細について質問がなされた。玉瀬（奈良教大）から、観察学習群についても各条件毎の成績を示せないものか、との質問がなされ、重要ではあるが方法上の検討を要する旨回答がなされた。北尾（大阪教大）から、偶発学習と実施回数がどのように関連するか、との質問がなされ、今回は仮説化しえなかった旨回答がなされた。北尾、伊藤から、注意と観察学習との関連について質問がなされ、発表者の見解が表明された。

606 杉村（奈良教大）から、テストで継時弁別が用いられていないので、成績差の解釈に制限をおく必要性が指摘された。丸野（九大）から、発達とともに相対反応・絶対反応が共にチャンスレベルに落着くとの仮説は立てられないか、同時訓練、継時訓練がもたらす学習効果の差異をどう考えるか、との質問がなされ、検討する旨回答がなされた。

607 北尾（大阪教大）から、基準量の明確化は量分数よりも割合分数の方が難しいのではないかと、量分数と割合分数の混同をどう検出するか、との質問がなされた。松浦（大阪教大）から、教示方法、指導形態、教材について質問がなされ、また結果の整理・分析は被験児毎に行うべきである、名数をつけた分数の意味をまず指導する必要がある、との指摘がなされた。

608 小島（北大）、坂野（千葉大）から、典型色の選定基準について質問がなされ、今回は文献に基づいて選定した旨報告された。小島からエラーの分析、坂野から典型色選定の発達差や病理による差、馬場（茨城大）から実験中の色名使用、典型色を一色にした理由、丸野（九大）から典型色の領域と学習方略の関係について質問がなされた。馬場から色相を操作する実験、北尾（大阪教大）からネーミングしやすさの尺度を作成・使用する研究の必要性が指摘された。（伊藤 康児）